

[Brief Report]

臨床研究センターでの年間を通じた 看護研究の相談・支援に関する検討



Examination of Consultation and Support for Nursing Research throughout the Year at the Institute for Clinical and Translational Science



鵜山 美樹 鈴木 渉太 高島 隆造
井上 隆 笠間 周 笠原 正登

看護研究（研究）とは看護の実践，教育，管理，情報科学など，看護専門職にとって重要な論点についての知識を開発するようにデザインされた系統的な探求であるとされている¹⁾。その歴史は1960年代から本格的に発展することになった¹⁾。2021年には日本看護協会による「看護職の倫理綱領」が公表され，そのなかで「看護職は，研究や実践に基づき，看護の中核となる専門知識・技術の創造と開発，看護政策の立案に努めることで看護学の発展および人々の健康と福祉に寄与する責任を担っている」と宣言されている²⁾。現在ではほとんどの病院で看護師が研究に組織的に取り組んでいる³⁾。

奈良県立医科大学附属病院（当院）の看護部においても1968年から現任教育の一環として院内看護研究プログラムを実施し，その成果は年度末の院内看護研究発表会（院内発表会）で報告している。看護部に設置された臨床研究委員会（看護部委員会^{※1}）がそのプログラムの支援を行っている。

奈良県立医科大学臨床研究センター（iCATs）は2015年に設立された。看護研究との関わりは，2017年に，医の倫理審査委員会に審査依頼をした看護研究についてiCATsが助言を行うようになったことから始まった。さらに2019年，看護部委員会より看護師の着眼点を尊重し

ながらも，臨床研究に近い考え方を学ぶためにもiCATsと連携したいという要請があり，iCATs内に新設された相談・支援部門（看護師と教員で構成）と看護部委員会とで本プログラムを分担して支援することになった。

全国的にみても臨床研究支援組織が看護研究を支援しているという報告はきわめて少ない。今回，われわれは相談・支援部門において，1年を通じて本プログラムに積極的に関わり，その内容を集計して分析を行ったので報告する。

研究支援体制について

本プログラムでは看護師が事前にオンライン学習システム^{※2}で研究の講義を受講したうえで，研究コンサルテーション用紙（研究目的，研究デザインなど）を作成し，看護部委員会と相談して研究テーマを決めている。

2019年度については看護部委員会の要請を受けて，9件の研究相談をiCATsで担当するようになった。2回目以降の相談はiCATsと看護部委員会が必要に応じて担当を変更するなどの調整を実施した。

奈良県立医科大学附属病院 臨床研究センター

Miki Uyama, Shota Suzuki, Ryuzo Takashima, Takashi Inoue, Shu Kasama, Masato Kasahara: Institute for Clinical and Translational Science (iCATs), Nara Medical University Hospital

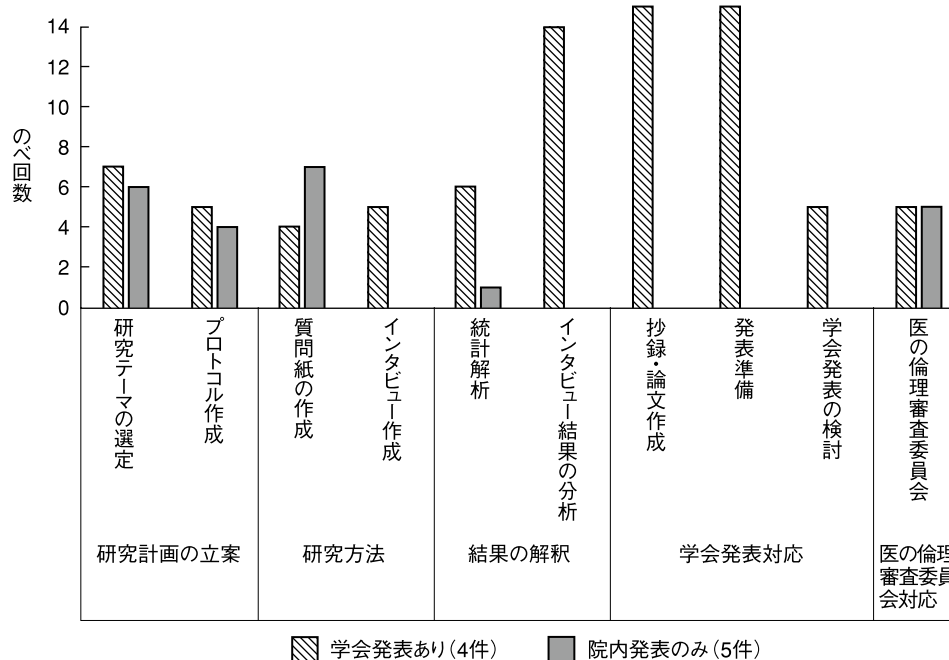


図 1 相談・支援内容と面談回数

2019 年度の iCATs での研究支援の実際について

2019 年度、看護部委員会から iCATs に依頼があった相談案件数は 9 件のうち、院内発表に加えて学会発表まで目指す研究が 4 件、院内発表のみを目標にする研究が 5 件であった。2019 年 6 月～2020 年 2 月に実施した相談回数は全体でのべ 100 回に上った。相談形式はすべて対面形式で実施し、1 回の所要時間の平均は 30 分～1 時間であった。また、1 つの相談案件に要した面談回数は最頻値 5 回であり、最大 24 回の面談を要した案件もあった。その内容は図 1 のように研究計画の立案、研究方法、結果の解釈、学会発表対応、医の倫理審査委員会対応まで多岐にわたった。学会発表まで目指す研究の支援はとくに結果の解釈から学会発表の対応に重点を置いた。一方、院内発表のみ目標にする研究の支援は、研究計画の立案や研究方法などに力を入れ、研究の実施以降は看護部委員会が支援を担当した。

iCATs での具体的な支援の方法について

看護師が研究に対して主体的に取り組むことを目標に自己決定学習のプロセスを重視すべく成人教育理論（アンドラゴジー）⁴⁾を活用した。成人教育では学習者の自己概念を把握し、学習者に適した指導方法や環境が重要とされている⁴⁾。成人教育理論にそったわれわれの支援の方法を下記に示す。

まず学習場面では雰囲気づくりとともに、看護師の経験や研究への意欲、研究プロセスを実践する能力などを把握することに心掛け、物理的・心理的環境に配慮して看護師がいつでも質問できるような体制に変更した。

研究の第一のゴールは看護師の自己決定に置き、院内発表のみか、それに加えて学会発表や論文投稿を目指すのかの目標設定、を促した。看護師が院内発表を目指す場合は、たとえ研究課題が業務改善であっても、できるだけその結果を臨床現場に活用できるようになることを意識してもらった。学会発表を目指す場合は、おもに看護実践に根差した看護研究を推進している日本看護学会

※1 看護部委員会の活動について：教育担当の看護部副部長が統括し、おもに院内発表会に向けて支援している。修士号をもつ数名の看護師と看護管理者など 10 名ほどで構成されている。

※2 オンラインでの学習システムについて：2016 年度より、学研メディカルサポートの e ランニングを活用した院内看護教育に取り組んでいる。初めて看護研究に取り組む看護者の個人学習として、看護研究コース（テーマは研究計画書の作成から研究論文の作成まで多岐にわたる全 11 コースで構成されており、1 コースあたり 30～60 分の講義内容）を受講し日々の実践をケアの質向上につなげる看護研究のエッセンスを学ぶことを目的としている。

学術集会での発表, もしくは専門分野における学会および査読審査がある論文投稿を目標に設定することをすすめた。さらに看護師の学習ニーズに合わせて iCATs の統計家, 教員, スタディマネージャーなどの専門家の助言も受け, 研究の質の向上に努めた。また, 看護師自身が設定したそれぞれの研究のゴールまでのスケジュール管理を主体的にできるように促した。

研究内容を決定する研究計画に関しては, 看護師の意欲や能力に合わせて, 研究テーマに関する先行文献や論文を提示することで看護師の意欲を高め探求してもらうことに配慮した。また, 研究方法の提案や問題提起などをしながら研究的な思考を養い, 研究グループ内の看護師どうしで考えて自己決定してもらった。研究に興味や関心があれば今後も継続的に研究課題に取り組むことを促し, 質の高い研究につながるような長期的な視点をもつことの重要性を伝えた。

2019 年度の成果について

相談案件 9 件のうち 2020 年度の日本看護学会学術集会または専門分野の学会で成果を発表し, 査読のある雑誌に投稿予定のものが 4 件あり, 現在投稿準備中である。さらに看護師が研究の意義や達成感を感じ, 次年度以降も継続研究として新しい知見を得たいと希望した案件が 1 件あり, 2020 年度も継続的に関わっている。

2020 年度に実施された全看護師に対するアンケート調査^{※3}では, 当センターの支援内容に 6 割程度の看護師が満足していることがわかった (図 2)。満足した点は「院内研究の相談を親身に聞いてもらえた」「研究のやり方や考え方で細かく指導してもらえた」「専門的なアプローチをしてくれた」などの意見があった。とくに「具体的で明確な指摘と助言があった。基本的な知識を自己学習する必要があると感じた」と研究に興味をもち, 自発的に学習したいという前向きな反応もあった。一方, 指導の結果, 大きく内容が変化したため「自分たちの方向性が相談後にわからなくなった」「やや強制力があると思った」などの意見もみられた。

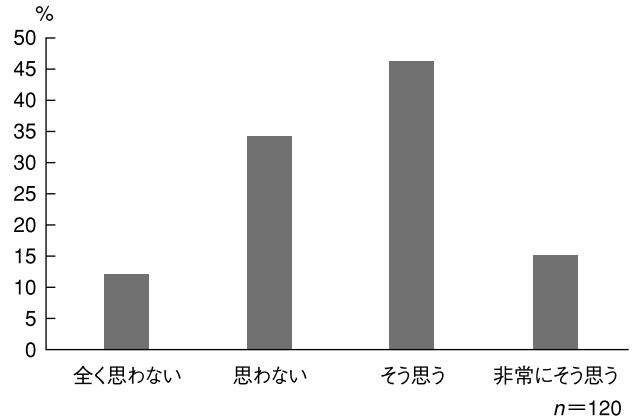


図 2 臨床研究センターの支援内容は満足いくものだったか?

考 察

iCATs では看護師が研究に対して主体的に取り組み, その成果を臨床応用できることを目標に自己決定学習のプロセスを重視した支援を行った。ノールズ⁴⁾は「自己決定学習のプロセスの中で最も重要なのは学習場面の雰囲気づくりである」と述べている。そこでわれわれは研究について主体的に学習するように指導し, 看護師自らがクリニカルクエストの解決の道筋を思考できればと考えて取り組んだ。その結果, 一部の看護師では相談に対する一定の満足度が得られ, 自分たちの研究に自信をもち, 学会発表や論文投稿を前向きに考えてくれたことは一定の成果ではと考える。さらに 1 年を超えて継続的に研究に取り組みたいという看護師も出始めたことから, 今後, 質の高い研究を実施できる看護師が増えることに期待したい。

しかし, アンケート結果にみられたように, 本来, 看護師が抱いていたクリニカルクエストについて指導するうちに, 看護師がやりたかったことを変えられたという印象をもたれることもあり, その点は反省すべき点であると考え。とくに「自分たちの方向性が相談後にわからなくなった」という意見は, 今後支援を行っていくうえでのひとつの課題である。今後は, 本プログラムに参加した看護師が研究を実施することの意義や喜びを知って, 次世代にモチベーションが受け継がれるようにしていきたいと考える。

2020 年の取り組みとして, 研究の質を高めることを目指し看護師が記載する今までの研究コンサルテーション

※3 全看護師に対するアンケート調査について: 2019 年 12 月~2020 年 1 月に当院の全看護師を対象に, 研究に対する認識や現在の研究支援体制に対する満足度などを調査する目的で, 看護部がアンケート調査を実施した。匿名性を担保し公表することに同意が得られた 432 名の看護師から回答を得た。そのうち看護研究支援を受けた経験者は 120 名であった。今回, 看護部ので承を得て引用した。

用紙に記載するときに、不完全であってもよいので研究の仮説や臨床研究のアイデア (PICO・PECO)、臨床研究の価値 (FINER) を含めるように指導している。それを相談のなかで解説し、一つひとつ埋めていくことによって、研究の内容を整理し、理解を深めてもらうことが目的である。

今後は、研究内容や研究デザインについて多くの相談が寄せられていることから、研究の質を高めるための啓発活動も重要ではと考える。そのため、学習意欲に合わせた教育体制 (たとえば iCATs 主導の看護師対象のオンライン学習システムなど) を検討していく必要があるかもしれない。しかし、iCATs 内で相談業務にあたっている人員は、モニタリング、広報、事務局業務などを兼務しておりマンパワーにも限りがあり、どこまで関わるべきかについての検討も必要である。将来的には看護師の実施する研究のレベルを高め、学会発表や論文投稿を目的とした研究が少しでも多く実施されるように貢献していきたいと考える。

結 論

2019 年度、iCATs が研究に積極的に関わったことで、看護師への支援に対する満足度は一定の評価を得た。さらに、9 件中 4 件が論文投稿に取り組むなど、研究の質

の向上にも寄与できた。しかしその反面、一部の看護師に困惑を生じさせる指導になった反省点もみえてきた。限られたマンパワーのなかで、学会発表や論文投稿などを目標にする研究を少しでも増やすことができるように、看護部委員会との連携をより強化しながら、支援の在り方を工夫していきたい。さらに専門家と連携し看護の質向上に寄与する研究を推進していきたいと考える。

【謝 辞】

本論文をまとめるにあたり、アンケート調査の使用にご許可をいただきました奈良県立医科大学附属病院看護部長、ならびに看護部臨床研究委員会の皆さまに心より感謝申し上げます。なお、本稿は第 11 回日本臨床試験学会学術集会において発表したものを加筆・修正したものです。

文 献

- 1) ポーリット DF, ベック CT. 近藤潤子監訳. 看護研究 原理と方法 第 2 版. 医学書院; 1993. p.3-5.
- 2) 公益社団法人日本看護協会. 看護職の倫理綱領. 2021. p 7.
- 3) 坂下玲子, 北島洋子, 西平倫子ほか. 中・大規模病院における看護研究に関する全国調査. 日本看護科学学会誌 2013; 33 (1): 91-7.
- 4) 中平紗貴子. 成人学習者の自己主導性を支援するアンドラゴジー. 月刊ナーシング. 学研メディカル 2018; 38 (12): 128-31.